平成の宰相たち
―指導者一六人の肖像―

Japanese Prime Ministers of the Heisei Era: Portraits of the 16 Leaders

渡邉 昭夫*, 秋山 訓子**, 宮城 大蔵***, 高安 健将****
Akio Watanabe*, Noriko Akiyama**, Taizo Miyagi***, Kensuke Takayasu****

Abstract

This article is a record of lectures on Japanese prime ministers who appeared in the approximately 30 years of the Heisei era. First, Akio Watanabe amongst other prime ministers, mainly discussed Kiichi Miyazawa, comparing him with Hayato Ikeda and Masayoshi Ohira. Next, Noriko Akiyama talked about her observations on the personalities of Ryutaro Hashimoto, Keizo Obuchi, Junichiro Koizumi, Yoshihiko Noda and, Shinzo Abe, based on her interviews with these leaders. Taizo Miyagi discussed the characteristics of Heisei era in the context of Japanese political history and international relations over the Asia-Pacific region.

Ⅰ．趣旨説明（高安健将）

本日のテーマは『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』です。これは1989年に始まり2019年まで続いた平成という元号を持つ時代が終わったことを受けて、この時代を振り返り、これから先の時代を見通すヒントを得ようとする企画です。もちろん短い時間ですので、16人全員について話をすることはできないと思います。あくまで16人の首相が格闘した時代と、その中の何人かのかたがたを中心的に取り上げることになると思います。

ところで、平成という時代を世界史的に見ると、米ソを頂点とする東西冷戦という枠組みが崩れ、核戦争の瀬戸際にいる緊張状態が緩和し、資本主義と自由民主主義が世界大に広がるかに見えたところから始まりました。しかし、実際には核は拡散を続け、軍事的な衝突はやまず、近年は世界大のテロリズムに加え、大国間の緊張も体制的な違いを強調して、再び抜き差しならない

* 東京大学・青山学院大学名誉教授、平和・安全保障研究所顧問　Professor Emeritus, University of Tokyo and Aoyama Gakuin University, Adviser, Research Institute for Peace and Security
** 朝日新聞編集委員　Editorial Board Member, Asahi Shimbun
*** 上智大学総合グローバル学部教授　Faculty of Global Studies, Sophia University
**** 成蹊大学法学部・アジア太平洋研究センター所長　Faculty of Law, Director of CAPS, Seikei University

本稿は2021年6月25日に収録、7月1日～9月30日にかけて配信されたオンライン講演会の内容に、報告者自身が修正を加えたものである。

ところに差し掛かっています。冷戦後の新しい国際秩序は30年を経ても見えてきません。

国内では、それまで絶好調であった日本経済が暗転し、バブルの後遺症も続きました。市場の在り方、企業の在り方は変わり、新しい業態、新しい企業も登場する一方で、日本は30年を経てなお、グローバルな競争の中で力強い次世代の産業や経済について、かつてほどには新しい姿を生み出すまでには至っていないように見えます。

この間で社会の在り方も変わり、風通しが良くなった面もある一方で不安定性は増し、従来あった家族や地域、会社等といったよりどころが弱まり、その代わりとなるよりどころも登場しているとはなかなか言えません。少子化の流れは欧州等では政策的な帰結として、変化の兆しが見ることができるのに対して、日本では少子化は続いており、人口減少までが現実のものです。ジェンダーや家族の多様性について言えば、社会的な理解が進んだ面もありますが、多様な人々がダイナミックな社会をつくり出すべく、指導的な立場に立つという姿は、まだこれからの楽しみとなっています。

他方で、この30年で日本政治の在り方は大きく変わりました。やはり自民党が政治の中心に位置しているという共通点はある一方で、自民党はかつてのそれとは大きく異なるものとなりました。登場してくる指導者たちも変わりました。特に政治改革が日本政治にもたらした意味は大きかったように思います。政治改革は政治腐敗を払拭し、強いリーダーシップを発揮できるようにするべく、政党中心の政治、政策中心の政治を目指した日本版の民主化改革でした。

政治改革運動が始まって30年以上がたちましたが、集権的な権力がつくり出される一方で、先に申し上げた課題に対して、効果的な政策がそこから生み出されている印象について、今日はなかなか持つことができずにいます。ブレーキ役として決定的な重要性を持つと考えられていた政党間競争は、機能を発揮できない状況に置かれたままです。政治改革はリーダーシップの発揮を期待したリーダーの資質についても楽観的であったのかもしれません。

その一方で、民主的に選出された政治家が、自らに過度な価値を置くようになった印象も受ける気がします。ただ、既に決まってしまった、変化の利かない状況とは異なり、今日の日本の政治、経済、社会が置かれた環境はまさに流動的です。指導者たちが果たす役割は平成の時代の30年にも増して、恐らく一層、重要性を持ってくるように思います。私たちの社会がどのような環境に置かれてきたのか、そうした環境の中を生き抜く上で日本政治がどのような指導者たちを輩出してきたのか、本日の講演会ではさまざまな角度から考える機会にできればと願っています。

さて、本日の講演をお願いしている講師の皆さまについて紹介します。実はこの講演会のタイトルと同じ『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』と題する書籍が、2021年3月にミネルヴァ書房より出版されています。本日の講演会はこの書籍をモチーフとしており、登壇いただく3人のうち、研究者の2人は関係する書籍の編者を務めています。

初めに、東京大学ならびに青山学院大学名誉教授の渡邉昭夫先生です。国際関係論、日本政治外交論の大家でいらっしゃる渡邉先生は、これまでに多くの研究を発表されています。『日本の近代8　大国日本の揺らぎ―1972～』、『アジア・太平洋の国際関係と日本』という研究の他に多くの編著があり、その一つが今回出版された『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』の親とも言うべき『戦後日本の宰相たち』です。また、渡邉先生は当センターとは古くからのご縁があります。1988年に当センター発行のアジア太平洋研究叢書第1巻『太平洋国家オーストラリア』を当センター初代所長でいらした故川口浩先生と共に、編者を務めてくださいました。分野における、本当の意味でのレジェンドである渡邉先生に参加いただくことができ、大変にありがたく思っています。

続いて、朝日新聞編集委員の秋山訓子さんです。秋山さんは朝日新聞入社後、特に政治部にお

いて、日本の政治指導者たちに対して、第一線で長く直に取材してこられたキャリアを持つ政治記者です。先日、私があるラジオ番組でご一緒したときに、菅義偉首相が衆議院で初当選した頃の非常にスリリングなエピソードを伺いました。これはぜひ他の首相たちについても、当センターで視聴者の皆さまと一緒に話を伺いたいと思った次第です。現在も日々、紙面で秋山さんの記事を読むことができます。著書も多く『女は「政治」に向かないの？』、『不思議の国会・政界用語ノート』等があります。昨年は『コーヒーを味わうように民主主義をつくりこむ』を出版しています。本日は身近でご覧になった指導者たちの生の実像から、日本政治の変化をうかがえることを楽しみにしています。お願いします。

配信映像より

（左上）渡邉昭夫名誉教授　（右上）宮城大蔵教授
（左下）秋山訓子氏　（右下）高安健将所長

そして、上智大学総合グローバル学部教授の宮城大蔵先生です。宮城先生はアジア国際政治史を専門としており、NHK記者から研究者に転じられた経歴を持っています。現在、日本の国際政治史の分野をリードされる中心的な研究者です。著書には『バンドン会議と日本のアジア復帰』、『「海洋国家」日本の戦後史』、『現代日本外交史』等があり、『戦後アジア秩序の模索と日本 ―「海のアジア」の戦後史1957－1966』ではサントリー学芸賞等を受賞されています。編者を務めた書籍も多く、『戦後日本のアジア外交』では「国際開発研究　大来賞」を受けられています。そして、最新の編著が3月に出版された『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』です。皆さま、本日はお願いします。

Ⅱ．戦後史の中の平成－時代と人と（渡邉昭夫）

最初に、私は今ご紹介があった成蹊大学の、目と鼻の先にある武蔵野第四小学校、当時は国民学校と申しましたが、そこに小学生の5年生から6年生にかけて通い、暮らしたことがあるという意味でも、皆さんがたと縁がある人間です。

高安所長から平成の時代についていろいろと話がありましたが、私は戦後史の中の平成と捉えて、紹介にあった『戦後日本の宰相たち』という私が編さんした本、それから後に登壇いただく宮城さんが編さんなさった『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』、この2冊の本を念頭に置きながら話を進めたいと思います。そこで平成30年はどういう時代であったのかについて、簡単な略年表を用意したのでご覧ください。それぞれの事件を皆さんと共有しているとそれだけで時間がたってしまうため、略年表をご覧いただき、どういう時代であったのかについて、それぞれの観点から頭の中に入れて以下の話を聞いてください。

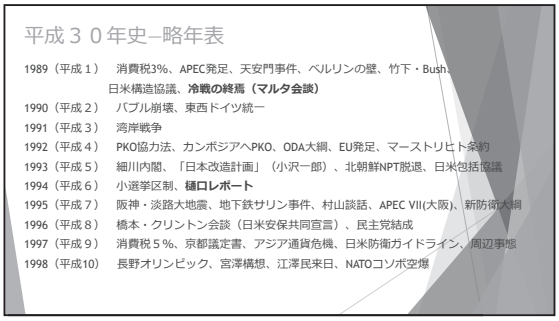
私はある意味で平成の30年とは、平成という名前にもかかわらず、非常に流動的な時代であったと一言で言えると思います。例のベルリンの壁が崩壊したことに象徴されるような冷戦の終焉でした。それから9月11日の事件、国内では3月11日の大地震等、さまざまな大きな変動があった時代です。客観的にこの時代のそういう情勢に着目すれば、流動の時代でした。その中で、指導者をはじめとして、われわれがどのように取り組んできたのかという主体の努力の点か

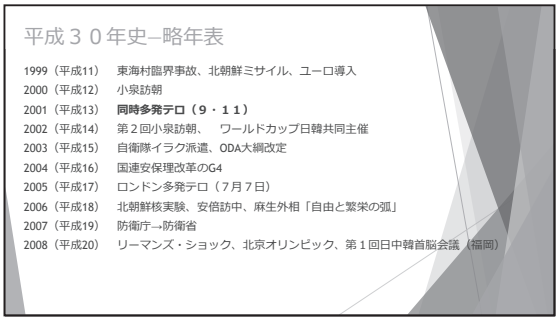
ら見れば、模索の時代と言えると思います。果たして流動の時代だったと特徴づけるのか、あるいは模索の時代と見るのかについては、皆さんといろいろな情報を共有した上で、またあらためて考えてみたいと思います。

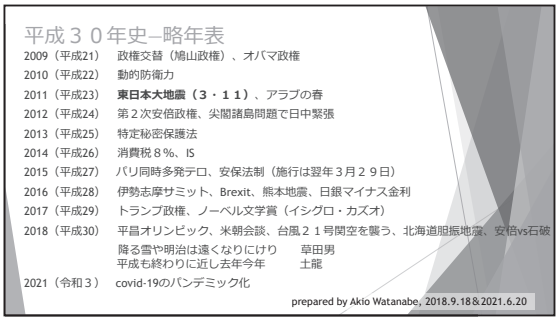
私がなぜ宰相たちという言葉を使うのかについて少し話します。要するに、総理大臣や首相です。変なもので総理大臣や首相は聞き慣れた言葉であり、何となく軽く見えるために多少は重みをつけたいという意味で、あえて宰相という古い中国語を使ったのは、われわれの中では日本の指導者たちに少しでも立派であっていただきたいという期待を込めて、宰相というややもったいぶった名前を付けています。そういうことで日本の指導者、総理大臣、首相を主に取り上げていきます。

最初に模索の時代だと申し上げました。考えてみると、必ずしも模索の時代は平成だけの特徴ではなくて、戦後日本をずっと貫く一つの見方だと思います。そのことを代表するのが宮澤喜一という人だと思います。これは今度の宮城大蔵先生が編さんされた本の中でも、現在と平成の時代とのつなぎの章で、宮澤喜一さんが登場します。より本格的なことは、私の編さんした『戦後日本の宰相たち』の中で、五十嵐武士さんが1章を割いて書いています。

宮澤喜一がどういう人であったのかについて、私は戦後日本を考える上で非常に意味のあることだと思います。というのは、宮澤喜一さんは若い頃に吉田茂さんの部下として、あるいは吉田茂首相に付いていった池田勇人さんの補佐役としてワシントンにいました。そして『東京－ワシントンの密談』という本を書きました。どこかで「考えてみると、これからの20年ほどの日本は綱渡りの時代です」と言われました。綱渡りとは、どのように均衡を取っていくかだと思います。その中で当時の張り合っていたアメリカとソビエト連邦という二つの大国間のはざまで、どのように生きていくかという意味ももちろんあると思います。より直接的には、国内政治で55年体制と呼ばれた流れです。非常に微妙な保守政党と革新政党との間の引っ張り合いです。その間のはざまでどのように日本の進路を定めていくか、そういうことを生涯のテーマとして生きた方が宮澤喜一さんだと思います。



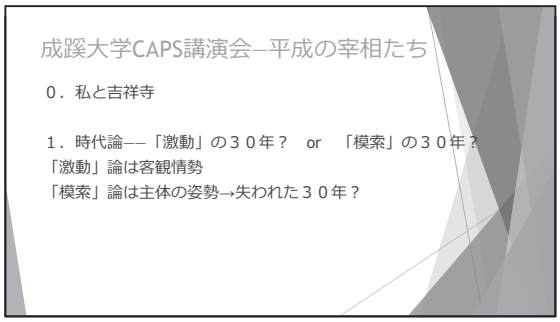


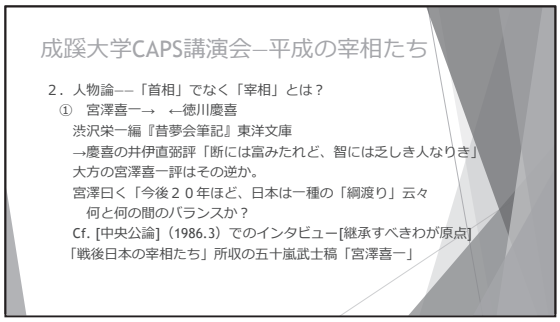


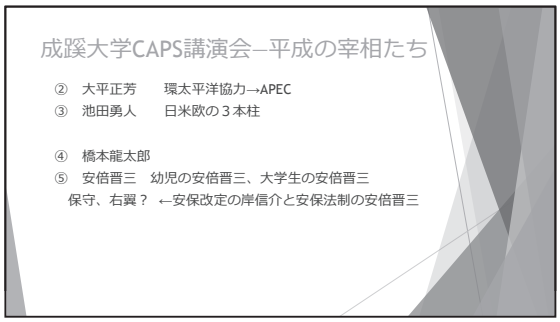
実は、私は宮澤さんと縁があります。1986年3月号の『中央公論』という雑誌で、宮澤さんと私が対談した記事が残っています。残念ながら私の手元にないので、それを読み返す時間がありませんでした。それは「継承すべきわが原点」というタイトルになっています。そこで綱渡りをしながら、どのように原点を追求して継承しよ

うとしたのかについてです。そういうことで、宮澤さんは最後まで非常に二つの引っ張り合いの中で、どのように均衡を保っていけばいいかを生涯のテーマとして生きられた方だと思います。

時間がないので、『戦後日本の宰相たち』の中にある五十嵐さんの書かれた宮澤喜一の章に関心のある方は後で読んでください。そこで非常に面白いこと言っています。渋沢栄一編の『昔夢会筆記』を挙げていますが、今、渋沢さんはさまざまな意味で注目の人物だと思います。ご承知のように、渋沢さんが農民から武士の世界である政治の世界に入っていくときに、当時はまだ最後の将軍になる前の一橋家に仕えるようになりました。そこで徳川慶喜さんの晩年に『昔夢会筆記』です。今風に言うと、オーラルヒストリー的なものです。元将軍の徳川慶喜さんに身近なかたがたが集まって、あの時はどうだった、こうだったということを色々と思い出していただき、それを記録に残したものが『昔夢会筆記』という本です。







その中で徳川慶喜さんはさまざまなことを言っています。有名な井伊直弼という人物については、「断には富みたれども、智には乏しき人なりき」と言われています。大方の宮澤喜一像は、ある意味でその逆であったかもしれません。つまり、知には非常に乏しいどころか、先ほどの綱渡りうんぬんの言葉にも表れているとおり、日本の歴史を広く見渡して考えている人であるため、総理大臣として非常に期待された人物ですが、総理大臣になってからあるいは政治指導者になってからの宮澤さんは、もうひとつ、こうであるという決然たる態度がとれず、最後まで綱渡りをした人だったと思います。そういう意味では、模索の時代を象徴する人物が宮澤喜一さんだったと思います。

ご承知の方も多いと思いますが、宮澤さんは大平正芳さんという人と一緒に側近として、池田勇人をサポートしたことで有名です。池田さんの所得倍増論では別の補佐役がいたと思いますが、池田内閣の基本的な姿勢として、寛容と忍耐を演出したのが宮澤さんと大平さんです。そういう意味では、大平さんと宮澤さんは非常に縁の深い方ですが、お互いにしっくりいかなかったようです。私個人は大平さんに接する機会がより多く、宮澤さんとは先ほど申したような形でしか話をしたことがありません。とにかく、そういう人物です。

平成の時代に入ります。『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』となっています。その中で、私が今度の宮城さんの本を読み、非常に印象付けられた２人の人物がいます。１人は橋本龍太郎、もう１人が安倍晋三という方です。橋本龍太郎さんと安倍晋三さんは、それぞれ決然たる考えが

あり、日本を引っ張っていった代表的な指導者だったと思います。

先ほど高安さんから話があったように、橋本龍太郎さんは新しい時代の、政治の枠組みをつくる上で、非常に根本的な仕事をされた方であると思います。残念ながら、私は橋本さんと面識はございませんが、ある公の席で橋本さんの演説を聞いて、大変に力強いリーダーという印象を持っています。安倍晋三さんについてはご承知の方も多いと思います。成蹊大学の出身であり岸信介さんの孫です。これは笑い話ですが、日米安全保障条約改定の頃、街頭では反対運動がありました。『岸信介伝』の中では、おじいさんをウマにして、幼児の頃の幼い安倍晋三さんが「安保反対」と言ったので、お母さんから「安保賛成と言いなさい」と言われたようです。

ところで、大学生になってからの安倍晋三さんについてはよく存じませんが、当時、成蹊大学で教えたある先生によると、大学生としての安倍晋三さんは、それほど印象に残る学生ではなかったと言っています。いつからあのような考え方を持つようになったのかについては、後で秋山さんや他の方から紹介があると思います。ご承知のように、安全保障条約改定の岸信介と安全保障法制の安倍晋三さんが、ある意味で比較の対象になると思います。安倍晋三さんの有名な言葉として「日本を取り戻す」、それから「戦後政治の総決算」と言われているので、先ほど申し上げた宮澤さんの右隅から左隅という危ない綱渡りの中では、非常に決然として日本を取り戻すことに重点を置いて政治を考えた方だと思います。

そういう安倍さんを保守的である、右翼であるという評価もありますが、私はあまりそういう言葉は適当ではないと思っています。戦後日本の宮澤喜一さんと、『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』の中の安倍晋三さんを比べながら二つの時代を考えてみるのも、われわれの今後の生き方を考える上で、一つの参考になると考えています。

宮澤さんを含めた宏池会の人たちというのはいわゆる政策通ですね。決断の人というよりも、政策の人ということです。そして宮澤さんという人は、決断できなかった人だと思います。文字通り模索をして、結局、最後まで行けなかった人。いろんな物事をよく分かった人だけども、もうひとつ決断力に欠けていたという評は、私は大筋としては当たっているのではないかと思います。なぜ宮澤さんがそういうふうに、いわば模索の一生を尽くしたのかっていうのは、戦後日本というものがまさに置かれていた状況のせいだと私は思います。

一方、決断といえば、岸信介なり、安倍晋三さんに至る清和会の系統です。そういうふうに考えると、安倍晋三さんという人は、宮澤さんが危うい綱渡りをした中でぐっと日本という側に力点を置いた。そういう意味の決断をしたという人だと思います。なぜそうなったかということは、いわば時代のなせる業だと思っております。それが狭い意味での戦後と、その後の平成との違いであり、それは日本自身の置かれた地位というもの、国際的な地位ということがやっぱり変わってきたのだろうと思います。

そういう日本の地位の変化ということをもたらしたのは、やや強引に言うと、大平さんの時代に始まっています。私は大平さんの時、アジア太平洋、環太平洋協力などいろいろな呼び方がありますけど、そういうテーマで幾つかの研究会に参画しました。そのことが具体的になって、アジア太平洋のAPEC（アジア太平洋経済協力）と今日のTPP（環太平洋パートナーシップ）につながっていく動きが始まったわけです。別に大平さんがそういう言い方なさったわけではないけども、アジアをバックにした日本という一つの柱があるということを、具体的に政策課題として取り上げて追求なさったのが私は大平さんだと考えて、その大平さんのために多少のお手伝いをしたという経験がある。まさにアジア太平洋というのはそこから来ているわけですね。

そうすると、なぜアジア太平洋が、今、インド太平洋になったのか。そして、QUADという日米豪印の4本柱のきっかけをつくったのは安倍さんなのであって、そうすると、そのもとにな

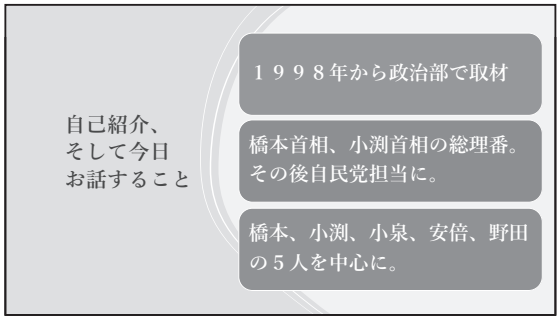
るのはやはりアジアにおける日本の立場をしっかり据えるという前提があって初めて、安倍さんの今の立場が出てきたと私は理解しております。取りあえず、以上でございます。

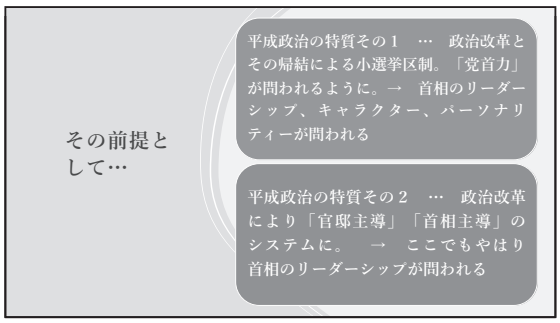
Ⅲ．平成の宰相たち－間近に接した首相の素顔（秋山訓子）

本日はお招きいただきありがとうございます。私は「平成の宰相たち－間近に接した首相の素顔」というタイトルで話します。先ほど渡邉先生から宰相という言葉をあえて使っていると話がありました。私のプレゼンテーションでは首相という言葉を使います。私が本日の話をさせていただく中で唯一のジャーナリストですので、できるだけミクロに迫った、私が直接あるいは間接的に接した首相たちの言葉や素顔を紹介したいと思います。そういう身近な感じで、あえて首相という言葉を使わせていただきました。

私の経歴を簡単に紹介します。1992年に朝日新聞に入りました。1998年から政治部で取材しています。その後は経済部やAERA編集部、あるいはGLOBE編集部での経験はありますが、基本的に政治を私のフィールドとしています。特に専門は国内政治です。あるいは最近ようやくフォーカスされるようになってきた多様性やNPOも私のフィールドで、最近では、選択的夫婦別姓あるいはLGBTQなどを取材しています。ようやく政権与党が目を向けるようになったので、そういう記事も書いています。

国内政治での自分のテーマは政局やリーダー論です。人に焦点を当てた政治取材も自分の軸としています。これは権力闘争が中心です。政治は数をどれだけ増やして、力を握って自分の取り組みたいこと、自分の目指す国づくりをしていくことだと思います。そういう権力闘争という局面で、少し大げさに申し上げますが、人間とは一体、何だろうか、人間性とは一体、何だろうかと考えさせられる場面が多いです。また後ほど申し上げますが、平成から令和に至る政治の中では、リーダー像がどういうものなのかがとても問われた政治だと思っています。そういうリーダー像、政治家の人間像もフィールドにしています。





私は1998年から政治部に所属していると申し上げましたが、政治部で新人は最初に総理番をします。朝から晩まで総理の後を追いかけ回して、どこで誰と会って何を話したのかということを記事にします。朝日新聞では「首相動静」、他の新聞だと「首相の一日」などで、朝の何時に公邸から官邸に入り、誰に何時に会うようなことが載っていますが、それをしているのが総理番です。これは物理的に本当に首相に近い所で取材して、くっついています。そういう意味で、首相の素顔を一番よく知る立場だと思います。

幸いに私は2人の総理番をしました。その後、自民党担当になり、再び官邸担当、民主党担当、外務省担当などもして今に至っています。本日は特に5人の首相に焦

点をあてます。橋本さん、小淵さん、小泉さん、安倍さん、野田さんです。この5人の首相の素顔を中心に紹介します。

最初に全体の話として二つのことを申し上げます。平成政治、平成の首相像、リーダー像の特質です。今回の出た本でも再三にわたって書いてあり、私もあらためてとても勉強させていただきました。政治改革が昭和から平成に至る政治の大転換であったと思います。その帰結による小選挙区制です。従来の中選挙区制に比べて、党首力が非常に問われるようになりました。党が統制する選挙です。このリーダーに託したいから入れる、ということが、選挙でとても大きな要素になってきました。首相のリーダーシップやキャラクター、あるいはパーソナリティーが非常に問われるようになっています。

もう一つ、政治改革の大きなキーワードで、平成政治でもずっと歴代の首相が模索を続けていたことが官邸主導、あるいは首相主導ではないでしょうか。これをシステムとしてどう整えるか、整えられたシステムの上で実際にリーダーシップをどのように発揮して、政治を実践していくのかが、平成政治の大きなテーマの一つだったと思っています。そのため、首相のリーダーシップ、人間像が大きな鍵を握る要素だと思います。では首相のリーダーシップということで、これからミクロに入っていきます。

最初は先ほど渡邉先生からも紹介がありました、橋本龍太郎さんです。私にとっては本当に思い出深い政治家です。1998年に政治部に初めて来たときに首相番、総理番をしました。そのときの総理番は今とは全然違います。今よりもずっと首相に近づけました。というのは、今の首相官邸は小泉政権時代に建て替えられたもので、総理番は1階のエントランスの所で取材します。でも、私たちのときは執務室の前まで行けました。執務室の前で本当に文字通り「番」をしていました。首相の所に訪ねてくる人のほぼ全員に、間違いなくアタックすることができました。誰と会っているかも今よりずっと分かりました。

それから、もう一つ大きな点があります。歩いているときであれば首相に話し掛けていいというルールでした。官邸や国会の中を歩いているときです。国会は大きいので廊下を歩いている時間がとても長いです。その間は横に立ち、首相に話し掛けます。もちろん答えてくださるかどうかは首相の自由ですが、そこで顔色や機嫌や気分、きょうのこの人はどういうことを考えているのだろうということを、本当に横で身近に観察することができました。

その中で今でも忘れることができない橋本さんの思い出があります。私がここにも書いたとおり、橋本さんは政策がとてもシャープで、議論好きでした。議論に対して、この人はとても誠実だったと思います。最近の国会でよく見られることですが、議論がかみ合いません。ご飯論法ともいわれていますが、総理大臣が質問にしっかりと正面から答えないことがよくあります。この人はそういうことがとても少なかったです。議論に対して誠実でありたいという気持ちのとても強い人でした。そのため、この人の国会議論はとても面白かったです。

話を元に戻します。私は1998年4月に総理番になり、初めて総理に直接質問してもいいという日がついにきました。そのときは5月でしたが、どうしようかと思いました。政策議論といっても橋本さんは怖そうでやり込められるので、あまり難しいことを聞きたくないと思いました。でも、人間像に迫る質問を何かしたいと思い、橋本さんがお母さまをとても大事にされていたこ

とに注目しました。お母さまはそのときに入院されていましたが、週末になるとよく病院にお見舞いに行っていました。非常にお母さまのことを大事にされていたので、これを聞きたいと思いました。もうすぐ母の日なので、母の日の質問をしようと思いました。

私は「総理、質問させていただきます」と言いました。本当に近い所から「もうすぐ母の日ですが、母の日はどのような思い出がありますか」と聞いたところ、返ってきた答えが全く私の想像と違っていました。橋本さんはとても怖い顔になって私を見ました。「その質問は答えたくないんだ。母の日ができたとき、今の母とはまだなじんでいなかったから。カーネーションを赤と白に分けるという発想が嫌いだった。二つに分けるのはすごく残酷だと思った」と言い、行ってしまいました。私は呆然として、首相を追いかけることもできませんでした。

橋本さんの実のお母さまは早く亡くなられていて、その後、お父様が再婚され、義理のお母さまでした。弟の大二郎さんはそのお母さまのお子さんです。橋本さんは義理のお母さんをとても大事にしていたのです。

母の日は子どもたちがお母さんにカーネーションを作りますが、当時はお母さんが亡くなった人には白いカーネーションを作りましょうとなっていたようです。そのことを思い出して橋本さんはとても難しい顔になりました。私は国会の廊下で質問をしていましたが、その後に橋本さんは官邸に車で移動しました。私たち総理番はそれを追いかけて走って官邸にいきますが、私は橋本首相の厳しい対応にショックを受けて、走る元気もなくて官邸にのろのろと歩いていきました。

仲間の総理番より遅れて官邸につくと「秋山さん、総理が探していました」と記者の仲間から言われました。「先ほどの女性記者はどこですか。私はあの続きが言いたい」と言って、私のことを探してくれていたようです。橋本さんが後で、「私は今は母をとても大事にしているので、皆さんは母の日にお母さんを大切にしてほしいです」と言われたそうです。彼はそういう気遣い、優しさがある人だったと思います。

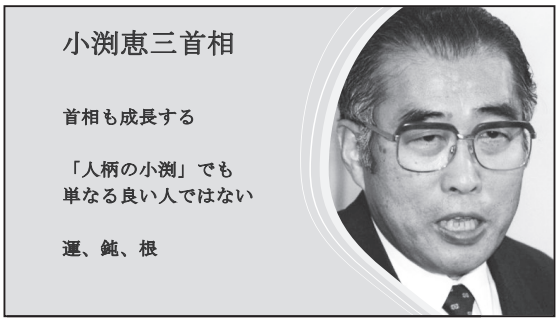
もう一つ、橋本さんのエピソードを紹介させてください。橋本さんが大事にしていたお母さまが亡くなられて、お葬式がありました。そのとき橋本さんはすでに首相ではなく、私はとても迷った末に、忙しかったのでご葬儀には行きませんでした。でも、気になったので弔電を打ちました。総理大臣経験者なので弔電は山のようにくると思います。でも、橋本さんは絵はがきで直筆の返事をくれました。橋本さんは写真撮影が趣味でしたが、それはご自分が撮影した写真の絵はがきでした。

私は政治記者歴が四半世紀ぐらいですが、VIPの政治家の取材をさせていただいたときはお礼状を書くことにしています。お礼状に対して返事をくれた方は2人だけです。1人はお礼状ではありませんが、この橋本さんです。もう1人は麻生太郎さんです。麻生さんは毛筆の非常に丁寧なお返事でした。麻生さんはそういう人です。

それから橋本さんはプリンスと書きましたが、本当に育ちの良い人です。興味のある方はインターネットで、橋本さんの笑顔の写真をご覧になってみてください。この人の笑顔はすごい笑顔です。育ちが良い方の、人を魅了する笑顔だったと思います。私はそこに人間性が出ていると感じます。

次は小渕さんをお願いします。小渕さんは凡人宰相といわれましたが、この方が総理になった当初の総理番をしました。私はそのときは20代でしたが、驚きました。人が良いのはとても伝わってきますが、でも、といいますか、正直言ってこの人が総理大臣で大丈夫なのかと思いました。彼はそういう自分を隠さない率直さがあったと思います。『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』でも「ボキャ貧」という言葉が出てきます。自ら自分のことをボキャブラリーが貧弱な「ボキャ貧」と称して、そういうのを全く隠しません。「ブッチホン」という言葉もありました。

人に電話をかけまくって意見を聴いていたんですね。



私は小渕さんの総理番を3カ月ぐらいして、その後に自民党担当になりました。その後1年ぐらいして、自民党の政治家にくっついて首相官邸に行ったことがあるのですが、小渕さんが全く変わっていたことにとても驚きました。本当にリーダーとしての風格や品格のようなものが出ていました。立場は人をつくるといいますが、このようになるのかと思ったことが忘れられません。

人柄の小渕さんといいますが、単なる良い人と言うわけではありませんでした。この人はとても執念深くて、権力に対する執着心がすごかったです。『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』にも書いてありますが、ライバルの加藤紘一さんが総裁選に出ると言ったときに、加藤さんは爽やかな政策論争をしたいと言いましたが、小渕さんそれを本当に根に持ってとても恨んでいました。小渕さんは圧勝しましたが、その後は加藤さんを徹底的に干しました。これが後に加藤の乱となり、ひいては小泉政権ができました。小泉政権と後の民主党への、政権交代のレールを敷いたことになったと私は思っています。政治は何があるか分からないし、人の営みだというのはこういうところに感じます。

もう一つです。小渕さんは自分のことを称して、運・鈍・根と言っていました。運・鈍・根があれば政治の世界を生き抜いていけると自分は信じていました。運はラッキー、鈍は鈍感であること、それから根性です。鈍感であるところで鈍牛宰相と自分で称していましたが、とても小渕さんらしかったと思います。

続いて小泉さんにいきます。この人は非常に政治家らしからぬというか、一言で言うと気持ちのいい人、爽やかな人です。表現がエモーショナルになりますが、シンプルな人だったと思います。政治家としての印象は脂ぎったところや権力欲を感じさせない人でした。私は小泉さんの派閥を担当したことがありませんが、ピンチヒッターで小泉さんを囲む記者懇談に行ったことがあります。そのときに私は初対面でしたが、この人は他の政治家と全く違いました。そのときは夏でしたが「皆で懇談するのだから、本年の夏で皆がしたことを一つずつ言っていきましょう」という感じで全員に気配りをして、皆の話を聞いてくれました。気持ちのいい人、と言いますか、そのような政治家のリーダーを見たことがありませんでした。裏表もなくて格好つけない人だったと思います。

よく小泉さんのことを一匹オオカミといいます。確かにそういうところはあります。本当に徒党を組むことが嫌いです。首相になる前のことですが、出張の際も秘書も同行させずにさまざまな所に行きました。あのクラスの政治家では、非常に珍しいことです。派閥の会長になった後も、地方出張に1人で行っていました。でも、この人は一皮むくととても派閥的な人間です。小泉さんはもともと清和政策研究会の人で、福田赳夫さんの下で修行していました。最初の選挙で落ちた後、福田赳夫さんの世田谷の自宅に、朝4時起きで横須賀の自宅から通って、文字どおり

下足番をしていて、そこで福田赳夫さんの謦咳に接し、書生的なことをしていました。

そのため、この人は政治家になってからも大蔵族で反経世会でした。福田さんにとって経世会、もとをたどれば田中派は、いろんなことがあって本当に恨んでも恨みきれない人たちだと思いますが、そこを壊します。この人は「自民党をぶっ壊す」と言って、そのとおりになりました。それは経世会を壊すことだったと思います。というのは、郵政は経世会の権力の温床です。総理になって、郵政民営化でそこを壊しました。でも、この人は永田町の中では変人といわれていたけれど、われわれ一般の人たちの感覚にはとても近いです。つまり、永田町での変人は私たち普通の世界の感覚に近い人だと私は観察しました。

次は野田佳彦さんです。民主党の3人の首相から、どなたを取り上げようかと思いましたが、野田佳彦さんにしました。鳩山さんや菅さんは極めて民主党らしいです。これは『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』にもありました。例えば鳩山さんは「新しい公共」という理念があり、その実現を目指していましたが、野田さんはそうではないと私は思います。

私は野田さんが総理大臣になる前に民主党を担当したことがあります。この人のキャッチフレーズは「日本丸洗い」でした。「日本丸洗い」はどこから出てきているかというと、ご存じの方もいると思いますが、坂本龍馬の「日本をいま一度、洗濯いたし申し候」からきています。「日本丸洗い」というのは、今の統治機構について、既得権にまみれて改革ができないことについて、丸洗いしてよりきれいな政治にしなければいけないというのが彼のキャッチフレーズでした。でも、きれいにした後に何をするのかわかりませんでした。

その頃、ちょうど民主党の代表戦がありました。私はそのときに取材をして、野田佳彦さんを間近に見て、この人は具体的にこの政策をしたいということがないと感じました。統治機構の在り方や政治のありようには関心があるけれど、例えば自分が教育改革をしたい、憲法9条を変えたいというような具体的な政策を感じられませんでした。この人が首相になると安定的な運営はするだろうし、司々の官僚さんたちの言ってくることを判断するだろうけれど、極端な言い方をすると、官僚さんの言いなりになるだろうと思っていましたが、本当にそうなりました。良くも悪くもそういうところがあったと思います。この人は政治家として極めて自民党的なオーソドックスさがあり、民主党らしくない首相だったと思います。

もう一つ、この人の特性として挙げたいこととして松下政経塾出身、ということがあります。松下政経塾というのは平成の日本政治の大きなファクターだと思います。松下政経塾の1期生から政治家になり、ひいては総理大臣になった人です。何の後ろ盾もないところで、この人がどのように政治家になってきたのかというと、この人は選挙演説がとても上手です。

彼の地盤である船橋市、習志野市が私の地元です。当時の高校生の間で野田佳彦さんは有名でした。県議をめざして毎朝駅頭で演説をしていました。彼が県議に当選したときは地元の高校生の間で話題になったほどです。彼がよく言うこととして「浮動票は不動票になる」があります。無党派層を自分の堅い支持層にすることができる、ということです。言葉の力をとても信じていた首相だと思います。皆さんで覚えている方もいると思いますが、この方が民主党の代表戦で勝ったとき、相田みつをの『どじょう』を引き合いに出した演説で多くの票を得ました。

もう一つ申し上げたいのは民主党が政権を明け渡す原因を作りました。彼が解散をいきなり打

ち出したのは党首討論のときです。今は党首討論は形骸化というか、ほとんど開催もされなくなってしまいましたが、彼は党首討論のような言葉の力を交わす場を信じて、そこで解散を宣言しました。言葉の力を信じる、非常にオーソドックスな首相だったと思います。

駆け足で、すみません。最後の安倍晋三さんのところです。私がここでとても強調したいのは、安倍晋三さんは第1次政権と第2次政権で全く違っていました。恐らく彼についてキーワードとなるのは、器の大きさだと思います。第1次政権のときにはお友達内閣を作ったといわれていました。演説を聞いても、失礼ながらこの人は狭量である、器が小さいなと思うことがとても多かったです。

一つエピソードを紹介します。共産党の論客で、既に引退された佐々木憲昭さんという方がいました。ムネオハウスの追及で名をあげた方です。彼が言っていました。国会の論戦の後で、偶然に他の首相とエレベーターで一緒になっても「先ほどの質問は参りました」「面白かったです」「またお手柔らかにお願いします」という感じで言葉を交わしたそうです。小泉さんは特にそのように話し掛けてきたそうです。しかし、安倍さんだけは何も言わなかったそうです。エレベーターに乗って安倍さんがいるときは、「こんにちは」くらいは言いますが、あとは言葉も交わさず、とても気まずい時間が流れたそうです。それが第1次のときです。

第2次になったときのことです。同じく共産党に宮本岳志さんという方がいます。彼が安倍さんを国会で追及して、その後にエレベーターで一緒になったそうです。そうすると、安倍さんから話し掛けてきたそうです。「先ほどの質問はありがとうございました」と言いました。「いえいえ、こちらこそ失礼しました」と宮本さんは答えました。ただ、宮本さんが言われたのは、その後の会話が深まらない、と。「儀礼的に言葉を掛けてくれますが、その後の会話が深まりません。例えば森さんだといろいろと話して面白いんですが」とおっしゃっておられました。

安倍さんは自分が第1次から第2次までの間、本当にどん底を経験して、自分が何のために政治をするのか、首相として何を残したのかについて考えて、器の大きさについてもとても考えたのではないかと思います。それでも総選挙の演説で「こんな人たち」と言い、やじを飛ばしました。そういうところで、変わらないなと思わせるところがあったと思います。ただ、安倍さんの場合は、それこそ平成の宰相たちがずっと追い求めてきた官邸主導をある種、完成させて、その中でリーダーシップを発揮していたと思います。

安倍さんは例えば集団的自衛権の問題や憲法改正など、明確にやりたいことがあった人で、ある種のビジョン型ではあるけれども、やはり渡邉先生からご指摘があったように、特に第2次政権で決断ということをすごく重視していた。彼がよく引き合いに出す民主党政権は「決められない政権」「悪夢のような民主党政権」とよく言いましたけれども、決められないっていうことに対して自分は違うのである、自分は決断力があるというところを、自己演出していたところもあるのかなと思います。私は、ただ決められないということは民主党的な決められなさではなく、物事の白黒はそうはっきりはつけられない、という面もあると思います。だから、たとえば宮澤さんはいろいろな政策ですごく悩み、逡巡されたのかなと感じています。安倍さんは良くも悪くもその逡巡がなく、そんなに簡単に決めてしまっていいのかなと思うところがありました。もっと逡巡してくれよって思ってしまうところもあったりします。宮澤さんはいろんなことが見え過

ぎるがゆえに決められなかったところがありますが、安倍さんはどちらかというと、それとは対照的なところにあったのかなとは感じます。

それに関連しますが、私は常々リーダーというのは遠景の人、近景の人というのがあると思っています。誤解を招くといけませんので、注意深く表現しなければいけないのですが、遠景の人というのは近くから見ると嫌なやつという意味ではなく、遠くから見たときのほうが魅力が発揮される人という意味です。これに対して近景の人は、近くで見るほど魅力が発揮される人です。

遠景の人の代表例でいうと、日本ではありませんが、バラク・オバマ（元アメリカ大統領）はその典型ではないかと思います。遠くから見るとすごく魅力、遠くから見てこそ魅力が発揮される。それと似た人は『平成の宰相たち』の登場人物でいいますと、細川護熙さんもそうではないかと思います。今いる日本のリーダー、首相候補の中でも結構、遠景の人は多いのではないかと思います。

逆に近景の人っていうのは、麻生太郎さんがそうですね。あと、私が番をしたことがある山崎拓さんもその典型ではないかと思います。近くで見るとものすごく親分肌の政治家というか、派閥の親分的で、今ではこういうタイプの人は少なくなりましたけど、義理人情で、面倒見が良くてという魅力があります。しかし遠くから見ると脂ぎっていて何を考えているか分からなくて、既得権にまみれてギトギトしていて、というふうに見えるところがあるのかなと思います。

遠景と近景のぶれが本当に少ない希有な人っていうのは、小泉さんだったのではないかなと思います。この人は近くで見たときも遠くで見たときもあまり変わらない。シンプルっていうのはそういう意味でもあります。とても分かりやすいから、今まであまりに分かりにくい人たちが続いたことへのアンチテーゼで、小泉さんのような人が首相になって安定政権を築いたのかなと思います。

私はやはりリーダーというものは言葉の力で民を納得させて、そして、ビジョンを掲げてよりいい国づくりの方向に導いていくということが大事だと思っていますし、それは時代が変わっても大事な要素だと思います。しかしこの5年から10年にかけて思うのは、SNSが非常に発達したせいもあって、言葉の大安売りというか、大バーゲンのような現象がすごく起きていると思います。典型的な例でいうと、ドナルド・トランプ（前アメリカ大統領）などがそうですけれども、Twitterで次から次へと言葉を流して、有権者と直結して言葉を簡単に次から次へと発するのですが、それがすごく乱暴で投げつけるというか、安売りしている感じがある。

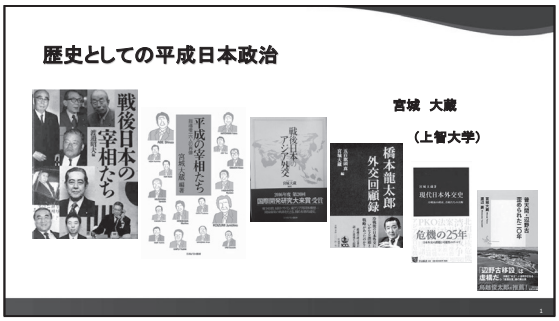
日本ですと安売りしているとは言いませんが、安倍さんが有権者と直接つながっている。トランプもそうですが、有権者というよりも、自分の固定ファンに彼らはすごく強かった。固定ファンとつながって、言葉を直接やりとりするという点で、遠景と近景のミックスバージョンっていう感じだと思います。これは有権者にとっては心地よさがある一方で、言葉をちょっと安易に投げつけると言いますか、宮澤さんならこれは言ったらいいか、どう表現したらいいかと悩むところを、悩まないで瞬時にぱっと投げつけちゃうようなところがある。だから安売り感みたいのも出てきてしまうのかなと思います。

ただ、これは固定ファンにしたらやっぱりうれしい。自分たちといつでもつながってくれて、安心できるというところがある。日本の総選挙の投票率ワースト3は、2014年、2017年と2021年です。特に2014年が一番低い。つまり安倍政権はよく言われていることですが、固定ファンに支えられていた政権というところがある。その中で言葉をどのように使うのかというのは、SNSで直接つながって固定ファンをいつも安心させてあげる、みたいなことがあるのかなと思います。

最後は非常に駆け足になり恐縮ですが、間近に見た平成の首相たちということで、私の発表は

以上で終わります。ありがとうございました。

Ⅳ．歴史としての平成日本政治（宮城大蔵）



上智大学の宮城です。私の発表は「歴史としての平成日本政治」としました。やや大げさなタイトルですが、「歴史としての」とは、ひとまず一つの時代を認識するときは、その時代が終わらないと時代として完結しません。ここでは平成という時代が終わりを告げて、一つの塊として捉えることができる、その程度の意味として使っています。

以下のようなこちらのスライドで何冊か本を並べましたが、一番左の『戦後日本の宰相たち』は渡邉昭夫先生が編集されたものです。これは本当に名著だと思います。さまざまな一線の政治学、外交政治史の方々が書いています。人物論的な深み、当時の政治の状況、それを取り巻く構造的なもの、そのバランスも見事です。また、さまざまな方が書かれているので、この人がこの首相について書くとこのようになるのかという面白さもあります。本当に何度手に取っても飽きることがない深みのある名著だと思います。文庫本になっています。

隣にあるのが『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』で、このたびに出た本です。『戦後日本の宰相たち』があまりにも素晴らしいので、勝手に続編を作った海賊版ではなかろうかと思われても困りますが、実はこれは渡邉先生とご縁がある話から始まりました。さらに脇のほうに私が編者をつとめた『戦後日本のアジア外交』という本を並べました。戦後日本とアジア諸国との関係を扱った本です。戦後の日本外交を考えるときに、対米関係が基軸であることに疑いはないかと思います。

一方で、戦後のアジアとの関係については本当に起伏に富むものでした。対米関係と異なり、選択の幅も広い。日本外交の現状とこれからを考えても、そうだと思います。アジアとの関係を通史としてまとめたこの本は運よく「国際開発研究　大来賞」という、経済を中心に日本の対外関係で大きな足跡を残した大来佐武郎の名前を冠した賞を受けました。その授賞式に渡邉先生が来てくださって、2次会まで付き合っていただきました。その席で先ほどの『戦後日本の宰相たち』のことが話題になりました。「宰相たち」の「平成版があると面白いのではないか」という話で盛り上がり、同席していた編集者も賛同して実際に企画として成立し、刊行に至ったという経緯です。ですから渡邉先生にも本書の冒頭で「刊行に寄せて」をお書きいただきました。

私はもともとは戦後日本とアジアとの関係を専門としていましたが、今回のような平成の日本政治や外交について、以下のようなきっかけで、もう一つの関心領域として取り組むようになりました。秋山さんから橋本龍太郎さんの話を聞きましたが、『平成の宰相たち』の隣りにあるのは『橋本龍太郎外交回顧録』という本です。日本国際問題研究所という外務省系のシンクタンクに『国際問題』という伝統ある雑誌があります。そこで500号を記念して、歴代の外交指導者にインタビューをしようという企画がありました。防衛大学校の校長先生等を務めた五百旗頭真先生が聞き役で、私はそのアシスタントとしてお手伝いで編集してまとめるという企画です。

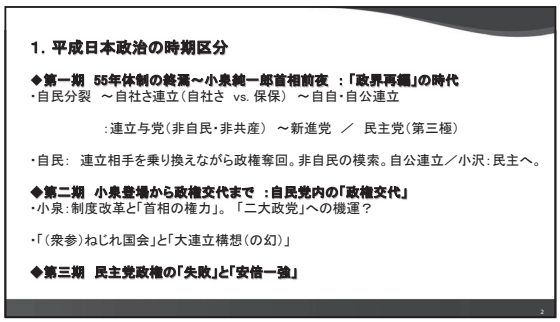
先ほどの渡邉先生の話を伺って思い出したのは、この企画の第1回が宮澤喜一さんでした。

五百旗頭先生が「宮澤さんはサンフランシスコ講和会議にも参加するなど戦後史そのままの生き証人であり、本当に長い政治的な履歴を持っておられますね」という話を最初に振ったときの宮澤さんの答えが「私と同じくらい長いのは山縣有朋ぐらいでしょうか」でした。明治の元勲です。明治の元勲である山縣有朋と自分を比べるという感覚に驚いたことを思い出します。

第2回が中曽根康弘さんです。中曽根さんで非常に印象に残っているのは、第一声から、「私は東京帝国大学在学中から統治をすることに非常に強い関心を持っていました」という話でした。私などは最初から統治される側かと、「恐れ入りました」という気分になりました。第3回目が橋本龍太郎さんで、非常に多くのことをなさった方ですが、不幸にして早く亡くなられたこともあり、あまり書かれたものが残っていません。一方でわれわれのインタビューではとにかく緻密なお話だったため、『国際問題』にはごく一部しか掲載できませんでした。そこで亡くなった後に掲載できなかったものもあわせて『橋本龍太郎外交回顧録』を編集しました。

そうすると、橋本さんのお話は緻密でしたが、実は言っていないこともたくさんあることに気づかされます。例えば1996年の日米安全保障条約の再定義のことです。「私はほとんど関わっていません」と言っていますが、実際には重要な指示を出しています。それから沖縄の米軍普天間基地の返還合意です。橋本さんは日本経済新聞のスクープで返還合意が表に出たことで、普天間の代替施設を具体的に詰める時間がなくなったと言っていましたが、実際には、日経新聞にリークしたのは橋本さん本人だったようです。代替施設が詰められていないままの返還合意の危うさを一番よく分かっていたのは橋本さん本人なのでしょう。結局、この問題は代替施設をめぐって迷走し、今も辺野古で大きな問題となっています。

『橋本龍太郎外交回顧録』で解題を書くことになり、橋本さんの発言の謎解きを随分しました。そこから、冷戦後の日本外交ということで中公新書の『現代日本外交史』を書きました。その中の普天間返還合意、辺野古新基地計画のことについて、これでまた1冊の本を作りました（『普天間・辺野古　歪められた20年』）。こういった経緯で同時代のことを扱ううちに、今回の『平成の宰相たち：指導者一六人の肖像』ということで、さまざまな方に参加いただき、本を作るところまで至りました。



渡邉先生の歴史的なことを踏まえた話や、秋山さんから人物像やリアルな話もあったため、私は若干の話の整理のようなことを、二つの観点から示したいと思います。一つ目は、平成日本政治の時期区分です。「歴史としての」と言ったときに時期区分をすることで、その時代の特徴が出てくると思います。平成という時代を政治の流れで見ると、私は三つの時期に分けることができると思っています。取りあえず一つ目の時期を第1期としましたが、55年体制の終焉です。宮澤喜一さんは55年体制最後の首相ですが、細川護熙政権の誕生で自民党が下野します。そこから小泉さんが総理に就任する辺りまで、ここがまずは一つの時期だろうと思っています。キーワードとしては政界再編です。最近はあまり聞かなくなった言葉のような気がします。

第1期を政界再編の観点で見ます。まずは55年体制が終わったのは、自民党が分裂したわけです。小沢一郎さんたちが出ていったことで終わりました。そこから社会党などと組んで細川、羽田の非自民連立政権ができました。それが次は自民党と社会党と新党さきがけの自社さ連立政権になりました。自社さ連立では村山政権と橋本政権です。自社さ連立下の自民党の中では自社

さ派、つまり保守リベラル路線でいくのか、保保派、つまり小沢さんが新進党をつくっていたので、自民党の保守的な人たちと小沢さんの保守と保守で組もうという保保連合でいくのか、こういう路線対立がありました。

自社さ連立政権が崩れた後は自自です。小沢さんが新進党を解体した後に作った自由党と自民党の連立です。さらにそこに公明党が加わり自公連立政権となります。自民党からすると、連立相手を乗り換えながら政権を維持した時期です。連立の相手がどんどんと変わっていきました。

それから、野党の方についてです。細川政権下の非自民・非共産の連立与党から社会党が出ていき、小沢さんを中心に新進党をつくりました。その傍らで結成されたのが民主党で、そのときは第三極と言っていました。自民党があり新進党があり第三極ということで始まりました。自民党は連立相手を乗り換えながら政権を維持し、非自民の側は組み合わせをいろいろと模索しました。結局、公明党は自民党との連立を選び、小沢さんは逆に民主党のほうに入っていきました。政界再編がこの時期のキーワードだったと思います。

次の第2期です。これは小泉さん登場から民主党への政権交代までです。小泉政権の登場はある意味、自民党の中での政権交代でした。それ以前は保守本流という言葉がありました。これは経世会の竹下派と、宏池会の宮澤派の系譜が組んで保守本流を自負していました。岸信介、福田赳夫の系譜を引く小泉さんたち（清和会）は、自民党の中枢から外されているようなところがありました。先ほどの秋山さんの話にもありましたが、そのことに対して小泉さんは恨み骨髄で、小泉さんは「自民党をぶっ壊す」と言いましたが、実際に壊したのは竹下派の支配であり、ある種、自民党の中での政権交代を果たしたと思います。

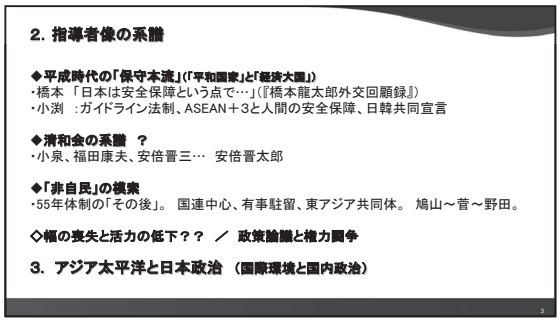
小泉さんは橋本さんが進めた官邸機能の強化、あるいはそれ以前の政治改革での小選挙区制、そういうものの使い方を首相として最大限に駆使しました。本日の司会である高安さんの著作に『首相の権力』という本がありますが、首相の権力を最大限に行使して、それで構造改革なるものを進め、自民党の中では経世会の支配をつぶしたと思います。

その一方で、野党はだんだんと話が民主党にまとまっていきます。総選挙のたびに、例えば小泉さんと民主党代表の岡田克也さん、それぞれが双方のリーダーとして対決する構図が固まっていき、二大政党制に収斂していくような機運が見えたのがこの時代だと思います。

ところが、小泉さんの後です。権力がそれほど強かったのかというと、実は参議院が存在していました。参議院選挙で一回負けてしまうと、衆議院でいくら多数を持っていても、事が立ちゆかないことが露呈します。それで小泉さんの後の首相は安倍さん、福田さん、麻生さんです。これらの皆さんが1年足らずで辞めていくのは、ねじれ国会が非常に大きいです。

これを打開するために、福田康夫さんのときには小沢さんの民主党との大連立構想がありましたが、実現に至らず流れました。仮にこれが実現していれば、当時は民主党の代表だった小沢さんからすれば、民主党としては連立に参加することで、まずは政権運営の仕方を学ぶことが大事であるということを言っていました。仮にこれが成立していれば、その後の日本政治のありようや方向や展開がそれなりに変わった可能性があったのか、ターニングポイントのような面白いことだと思います。

そして第3期です。平成の日本政治にクライマックスがあったとすると、それは民主党への政権交代だったと思います。民意が権力の所在を選択したという意味では、日本史の中でも特筆すべき出来事でしょう。そして、結局はそれがうまくいかなかった、あるいは、うまくいかなかったと総括されていることがきわめて大きな影響を及ぼすことになっています。第2次安倍政権では「安倍一強」と言われましたが、「悪夢のような民主党政権」というのが安倍さんの口癖だったように、民主党政権の失敗なるものの鏡として安倍一強が存在しています。民主党政権の失敗



になるものと安倍一強は鏡合わせのような存在であり、これが第3期だろうという気がします。

「失敗」とかぎかっこを付けたことについてです。私は民主党政権が手掛けたことには、見るべきものも多かったと思います。一時期、日米連携のカギだとして世をにぎわせたTPPも民主党政権で始めています。自民党に引き継がれたものもあります。一番大きな問題は民主党政権を当事者として担っていた皆さん自身が総括をできていないことでしょう。例えば、方向性は間違っていなかったが、マネジメントが問題だった。そういう本当の意味での反省、くみ取るべき教訓は何なのかといった整理をしっかりと国民に示すことです。そこがなかなか見えないまま、離合集散を繰り返しているように見えます。本当に失敗なのか、失敗だとするとどこが教訓なのかです。ぜひそれをしていただきたいと思っています。

時期区分につづく二つ目の見取り図では、指導者像の系譜を三つに分けてみました。一つ目の系譜だと思うのは、保守本流という言葉です。「平成時代の保守本流」と付けました。ただ、考えてみると、保守本流とは結局は自民党の中の話です。55年体制は基本的に政権交代がありません。社会党は政権を取るつもりがあまりありませんでした。自民党の中での疑似政権交代です。保守本流とは自民党の中での多様性がある代わりに、政権交代はないという55年体制からきている言葉だと思います。

渡邊先生の1986年の論文を拝見すると宮澤喜一さんとの対談で、「地下に眠っておられる吉田茂さんの名前を使う必要はない、吉田ドクトリンという言葉を使う必要はないので、吉田さんを静かに眠らせてあげましょう」ということを再三言われていて、確かにそうだと思いました。従って、吉田ドクトリンなるものの中身を言い換えると、恐らくは戦後日本の二つの看板であった平和国家と経済大国です。この二枚看板に行き着くと思っています。

その平成バージョンがどういうものであり得るかということを示したのが橋本龍太郎さんと小渕恵三さんだったと思っています。例えば橋本さんはタカ派と言われたこともありましたが、『橋本龍太郎外交回顧録』を今、あらためて見て非常に印象に残るフレーズがあります。これからの日本外交をどう考えますかと問われて、橋本さんは「日本は安全保障という点で、私はこれからも出過ぎる能力を持つ国ではないと思いますし、また持てないだろうと思います。今、非常に無理をして自衛隊を出したがる方もいますが、私は必ずしもそれに賛成ではありません」と答えています。ガイドライン、安全保障の再定義にしても、危機管理のような意識が強かった。法制度上、穴になっているところをふさがなければいけないということがあったと思います。

それから、小渕恵三さんです。小渕さんのときにガイドライン法制や安全保障体制の強化が進みます。その一方で、当時はアジア通貨危機がありました。そこから生まれてきたのがASEAN＋3という地域主義の枠組みです。「3」とは日本、中国、韓国です。小渕さんはそういうアジア地域主義を形成する旗振り役を務めました。あるいは、東南アジア諸国への財政支援に「人間の安全保障」という理念を付与しました。IMFが通貨危機救済の条件とした構造調整によって最底辺に転落する貧困層、日本の援助はそういう人々に届くものでありたいという考え方ですね。それから、金大中大統領との日韓共同宣言による韓国と歴史的な和解です。ガイドライン法の整備など安全保障体制の強化を進める一方で、アジア地域主義や日韓の和解はある種の緊張緩和をもたらす意味があったと思います。私は安全保障体制の強化と地域主義の形成が冷戦後の日本外交

の2本柱だと思っていますが、その辺りのバランスを取ったのが小渕さんだと思います。

ただ、このときのASEAN＋3と言われた、広い意味での東アジアでは、経済規模の6割ぐらいは日本が占めていました。当時の日本は中国の経済規模の4倍という時代だったため、圧倒的な日本の経済力があって地域主義のイニシアチブをとることもできました。今は必ずしもそういう条件が存在しているわけではありませんが、見るべきものはあると思っています。

指導者像の二つ目が、清和会の系譜です。岸信介さんから福田赳夫さん、それから小泉さん、福田康夫さん、安倍晋三さんの系譜です。小泉さん以降は、ほぼ清和会が天下を取っている時代が続いています。清和会とは、もともと戦前から政治家だった人たちが多いところです。吉田とか宏池会は戦後派で、戦後というか占領期に出てきた、戦前の権力構造とは切れているという自己認識だったと思います。

清和会というと、右派や憲法改正というイメージで捉えられています。実際にそういうところはありますが、それほど単純でもないと思います。例えば小泉さんは、あまり歴史認識や憲法改正にこだわりはありません。首相のときに毎年、靖国参拝に行っていましたが、退任後は一回も靖国神社には行っていません。そのことを聞かれた小泉さんが、「分かっていないな、総理大臣だから靖国に行く意味があるんだろう」と言っていて、分かったような分からないような感じが、小泉さんらしい感じもしますが。

それから、安倍晋三さんです。先ほど渡邉先生から右派というようなこととは違うのではないかという話がありました。私が印象に残っているのは森喜朗さんの言葉で、第1次政権で安倍さんが総理になったときに、「安倍晋三さんは保守や右翼といわれているが、そうではなくて、彼は戦後生まれ現代っ子なんだ」と。恐らくその辺りが実像かなという気はします。

あとは安倍晋太郎さんです。秋山さんの朝日新聞政治部の大先輩に当たる若宮啓文さんと河野談話と慰安婦について話したことがあります。河野談話は宮澤政権で河野洋平官房長官が行い、これに対して自民党の右から非常に反発がきました。若宮さんは「病気さえなければ安倍晋太郎さんが首相になっていたはずで、安倍さんの下で河野談話のようなことをしていれば、それほど自民党の右からの反発はこなかっただろう」と。いわば、清和会のリベラルというのか、そういう路線が安倍晋太郎さんで、福田康夫さんもそこに近いと思います。清和会だからといって、全てが今で言う、安倍カラーのようなもので染められているかというと、必ずしもそうではないだろうと思います。

指導者像の三つ目は非自民系における模索です。55年体制は終わったとよく言いますが、当たり前ですが自民党はなくなっていません。なくなったのは社会党であり、それでは社会党が55年体制で占めていたところを、社会党がなくなった後は何で埋められているか、こういう話が重要だと思います。それが非自民の模索です。外交安全保障では鳩山さんのことばかりが取り上げられますが、例えば小沢一郎さんはずっと国連中心主義を標榜しています。それから有事駐留論です。つまり、日米安保体制は重要だが、米軍が常時、日本に駐留している必要はない、有事のときに来ればいいのではないかという議論です。それから東アジア共同体です。こういうことは細川護熙さんや小沢一郎さん等、さまざまな人が言っているので、一つの非自民の流れだと言っていいと思います。

先ほど野田佳彦さんの話がありましたが、民主党政権の首相3代の鳩山、菅、野田についてです。鳩山さんと野田さんは特に外交、安全保障、歴史認識では全く逆です。鳩山さんで始まった民主党政権が野田さんにいき、外交、安全保障、それから歴史認識でいえば、私は野田さんが安倍晋三さんとほとんど変わりはないと思っています。非自民の中でも幅があるということです。以上の指導者像の系譜で思うのは、平成の日本政治におおよそ三つの系譜があったということ

で、清和会が非常に大きな力を持つようになり、一つ目の保守本流の姿が自民党の中でもなかなか見えなくなってしまいます。本来は小選挙区で政権交代という今の仕組みだと、自民党の中は非常に集権化されます。代わりに政権交代が起きます。逆に55年体制のときは、政権交代はないけれど自民党の中に多様性があります。そういう意味では、自民党の中がばらばらではなくて集権化されるのは一つのあり方だと思います。

しかしその一方で、政権交代がなかなか起きにくい状況になってしまうと、結局は政治の姿が単色、モノトーンになっています。三つのうち清和会の路線が今は中心になっていますが、保守本流と非自民系が見えなくなってしまっています。結果として、日本政治が非常にモノトーンの一つの色に染められて、今は他が見えない状況にあると思います。

山崎拓さんという自民党副総裁を務めた平成政治のいわば名脇役がおられます。山崎さんが言われていたのは、政策論争と権力闘争はセットであり、これがあって政治は活力が出るということです。そうすると、今は政策論議もなく権力闘争もあまり見えません。私としては、もう少し政治の世界には議論の幅と多様性がある、そのことが国民にとってはもちろんですが、権力を持っている側にとっても好ましいことだと思っています。

三つ目の観点であるアジア太平洋と日本政治についてですが、冷戦後の日本外交の2本柱は、安全保障体制の強化と地域主義だと思っています。この地域主義がある意味、安全保障上の緊張のガス抜きになっているようなところがなくはない。信頼醸成とまでは申しませんが、一緒に何かやるというフレームワークをつくるということです。だから、私はガス抜きとしてやることに十分意味はあると今でも思っています。その点について、近年はこの地域主義も安全保障化しているというのが特徴だと思います。

つまり、アジア太平洋やインド太平洋など、いろいろな枠組みが出ていますが、やはり中国包囲網的な安全保障の色彩が非常に強くなっている。そうすると、何でもかんでも対中包囲網的な発想で考えることがどこまで生産的なのかという話はあります。例えば一帯一路というのは不良債権化しそうな案件ばかりがある。中国だって無駄なお金の使い方で間違ったなと思う時期が来るように思います。ですからそれに対抗して日本が同じようなことをやるというのは、本当に生産的なのかということです。

その辺りのバランスというのでしょうか、権威主義的な体制に対抗するために国内で強権的になり、自分も権威主義的になってしまったということでは一番、元も子もないわけです。やはり中国ということを念頭に置くにしても、本来、日本が持っている強みとか、つくってきたものの価値とか、そういうものをしっかり押さえて、それを基本に対応するということが大事だと思っております。

戦後の日本で「平和国家」と「経済大国」が二枚看板だったというのは、冷戦下において安全保障や軍事のことは事実上、アメリカがやってくれていたので、日本としてはあまり考えなくてよかったというところがありました。その前提があって平和国家や経済大国と言っておれた。つまり、明治以降のことを考えると、朝鮮半島、満州、大陸をどうするかということが日本政治にとっては非常に圧倒的に大きな話で、それで軍のことなどいろいろあって、結局最後は帝国日本をつぶすことになったと言っても過言ではないと思います。そういう日本という国を運営していく上で、このアジアとの安全保障という問題は、本当は非常に重たい話です。これをアメリカが肩代わりしていたわけです。日本が自分で考えなくてよかった。だから平和国家と言ってこられたところがあるわけです。

しかし冷戦が終わると、必ずしもアジアについてアメリカの利害と日本の利害が一致するところばかりではありません。日本としてはやはりいろいろ自前で考えなくてはいけないことが出て

きた。それで、安全保障上のアジアへの対応ということが政治の世界でも大きな話になり、それが世論のナショナリズムとも結び付いて非常に大きな話になったという状況だと思います。ただ私としては、さっきの繰り返しですけれども、それにあまり対抗するために、日本が本来培ってきた強みとか魅力とかを損なうようなことになってはいけないのだろうと思っております。